

アオモジの花

— 木寺良子 短歌集 —

短歌作 .. 木寺 良子
編集 .. 木寺 佐和記

目次

まえがき	1
第1章 合同歌集つばき 福島短歌会（昭和六十二年二月八日発行）より	2
第2章 合同歌集つばき第二号 木寺妙子編（平成十年二月十日発行）より	11
第3章 一〇〇号記念 爽樹合同歌集より	30
第4章 私の短歌から さよなら福島町より（文協いろは、第27号より、平成十八年三月一日発行より）	38
第5章 文教いろは（27号、29号、30号）より	45
第6章 二〇〇号記念 爽樹合同歌集より	51
第7章 残っていた色紙・短冊より	60
第8章 残っていた手書きメモより	66
木寺良子・年表	68
あとがき	78

まえがき

「免状花」「卒業花」とふ三月の島山に咲くアオモジの花

「一〇〇〇号記念 爽樹合同歌集 二〇〇五年（平成一七年七月二〇日）」に掲載されている母の歌の一つです。長男の私は昭和二十五年の生まれですが、ふるさとの長崎県松浦市福島町（旧北松浦郡福島町）の島内の子供たちは、「卒業花」と呼んでいたと思います。雑木林の伐採跡地に最も早く成長する雑木の一種で、派手さはありませんが、花が少ない卒業式の季節にふるさとの島の山には黄色の花が目立ちます。東京で若い時を過ごした母には、少々珍しかったと思います。

母、木寺良子は一九二七年（昭和二年）東京で生まれ、一九四四年（昭和一九年）の夏、疎開で父・小川政平の郷里であった福島町へ移り住みました。その後、私の父となる木寺諭吉と結婚、三人の男児（佐和記、知記、昌記）を生み、育て、二〇一八年（平成三十年）一〇月に九十一歳の生涯を終えました。母の趣味の一つが短歌で、時につけ詠んだものを福島町文化協会の「文教いろは」、「合同歌集 つばき」、「爽樹合同歌集」などに掲載させていただいていました。お陰様で、その短歌を通じて、母の思いを後年になってからですが知ることができます。家族の写真とともに紹介させていただきます。



第1章 合同歌集 つばき 福島短歌会（昭和六十二年二月八日発行）より

以下、「つばき」の序文（木寺 妙子）を引用します。なお、妙子は、良子の夫・諭吉の姉にあたります。

私達の、「福島短歌会」が、正式に発足してから、満十周年を迎えました。

四季おりおりの生活の中から、生まれた歓びや、悲しみ、を短歌に託しながら、拙い歩みをつづけて参りましたが、この程、誰からともなく、こちらで一冊の本にまとめ、生きた証しにしようではありませんかとの発言があり、早速、私とその労をとるようになりました。

かくして、ここに十人の心の願いが叶い、合同歌集「つばき」が誕生したことは誠に御同慶に存じます。

しかし、今日のこの歓びを待たずして、土谷文人氏が亡くなられたことは、ほんとうに残念であります。私共は心から土谷氏のご冥福をお祈りすると共に、謹んでこの歌集を、墓前に捧げたいと思います。

合 掌 昭和六十一年十一月吉日

ひぐらし（木寺 良子）

ふるさとの海辺に戻り住む日々
にひぐらし鳴くをこの夕べ聞く

ふるさとの海辺の山にひぐらしが鳴くなり
夫と耳を澄まして聞く

朝な朝な松葉牡丹は咲きつげり
今年まで住む公舎の庭に

秋晴れの海輝きて荷揚げ場の片隅に
今日も初干してあり

浜ぼうの黄色もみちは海に沿う護岸道路の果てに
して燃ゆ

二人きりの夕餉の膳に足るほどの牡蠣打ちを
れば霰降り来る

老いづきて二人住む家新しき緑の木の香が冬陽に匂う

裏山の中なる桜咲き出でて梢の花の空に揺らぐも

庭に今櫛の若葉の色やさし老眼進みし目を憩いはする

島の町にオーケストラ来てスメタナの「モルダウ」我は初めて聴けり

曼殊沙華時をたがへずわが庭に白きも咲きて彼岸来にけり

わが島の秋の景色も遠来の友もてなさむすべの一つに



少女の頃（東京にて）



母・カヅと妹弟（東京にて）



上野高等女学校時代（東京にて）

時雨降る夕べとなれど友連れて我が住む島を案内し巡る

木蓮の葉の落ち蕾持つ枝のあらはになりて冬に向かふも

寒肥えを庭木に施しゐる夫の汗ばみてをり霜ばれの昼

菜の花の今年はまだ咲かぬまま姑の逝きし日巡り来にけり

医師の前死に近けれど慎みを失はざりし我がしゅうとめは

大宰府の梅見る人の群れの中かざぐるま持つ孫の手を引く

かざぐるま回す風来て大宰府の梅の吹雪を孫と浴びをり

庭すみの桜の若木咲きにけり孫入学に植ゑし記念樹

孫のために精霊バツタ捕らへをり終戦遠く四十年過ぐ

噴煙のなびける阿蘇の中岳に子に連れられて夫と来て立つ

奥阿蘇の田楽の店夏なれど囲炉裏かこめばひぐらしの声

亡き父が偲ばるるなり家跡の隅に残りし紫陽花の咲く

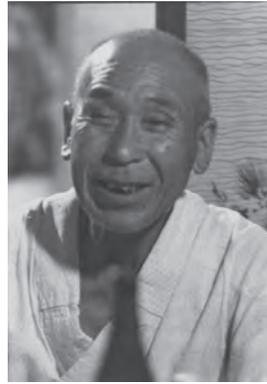
疎開して帰農の父に従ひし母は農婦になりきりて老ゆ

炎天に老母も出でて刈り急ぐ磯田に時折り海からの風

八十路なる母の手作りコロッケを秋の夕べの膳に並ぶる



母・小川カツ



父・小川政平



祖父母（平吉・タイ）



実家の庭で政平と孫（昌記）



福島小中学校勤務時代（左より3人目は夫となる諭吉）



教え子や同僚の先生方と



実家周辺の最近



実家前の海を望む

第2章

合同歌集

つばき第三号

木寺妙子編（平成十年三月十日発行）より

以下、「つばき」第三号のあとがき（木寺 妙子）を引用します。

平成十年が、間もなく終ろうとしています。私は心のおもむくままに「つばき第三号」を思い立ち、七人集を編んでみました。

この七人は、深く郷土を愛し、短歌を愛し、短歌を愛しつづけた仲間達です。

作品としては、未だ未だ、未熟ですけれども、これが精いつばいの表現ですので、少しの悔いも残りません。私はむしろ高く評価しております。

印刷製本は、今まで通り、三重県の青木様にお願いました。

青木社長様は、歌人であられ、元保護司です。私もまた、歌人のはしくれで、元保護司、この共通点の上に生じた信頼感は、滅多にあるものではありません。

私はもう高齢、この一冊に萬感を込めて、編集を終わりました。

平成十年十二月二十五日

満八十三歳の誕生日

合歡の花（木寺 良子）

落ち合うと来たりし道に母の声まだ遠きより吾の名を呼ぶ

今にして初めて聞きし事などのありて吾が家に老母の寝泊まる

斯く長く生きる日あるを思はずに老いたりけりと母のつぶやく

吾が叔母の野辺の送りをせむと行く道に連なり咲く曼殊沙華

珍しきカルメラなるを焼く夫を孫たち囲みて今宵にぎはふ

癒ゆる日を待ちて集はむ約束のありしに友は帰らずなりぬ

七十路の顔になりしと自らを鏡に見つつ夫の言ふ声

老人の独り住まひて何事も無き日は午後ピアノ聞こゆる

八十路半ば病み臥す母の来年に撒きたき豆の種のこと言ふ

沼の面に氷張りたる朝にしてみぎわに一羽白鷺あゆむ

病むことの無かりし吾が臥したれば子ら幾たびも電話してくる

胃の癌に憂いは消ゆれど自覚なき胆石ありしを知らされにけり



結婚後の住居の日ノ浦で長男と
(背景はダブ[※])
※ダブ：池・沼の方言



長男・次男・妹のはつひと



息子たち3人



息子たち3人（福岡市動物園で）



夫・諭吉と（日ノ浦の2番目の住居（町営住宅）前で）



息子たちと弟・寛治



妹・節子



義姉・妙子や義兄・和田家の家族



義姉・妙子の子供たちと息子たち



日ノ浦の近所の子供たち、息子らも



日ノ浦の近所の方々と（子供は三男、右が義母チエ、左は義姉・妙子）



義母（木寺チエ）



三男・昌記と

B・G・M流れてゐると思う間に吾は眠りて手術済みるし

秋立ちてつくつく法師鳴く声を今年も夫と墓山に聞く

父祖の墓の掃除この後幾年なしならむと夫のふと言ふ

露に濡れ摘みし茗荷の香に立つを今朝も朝餉に汁に浮かせり

道端の無人売場に白菜のひとつ残りて夕陽射しをり

懐かしさ抑へ得ざれば来たりしと老人不意に夫を訪ね来

それぞれに兵の日ありて七十路の今に会ひをり夫とその友

瘡と知り余命二年と打ち明けしその友のこと夫のまた言ふ

ホーム建つと切り拓かれてゆく山に今年までなる櫛紅燃ゆ

年終わる日にて帰省の子と夫はみ墓清むと連れ立ちてゆく

旅先のニュージラランドより電話にて年賀をのぶる孫の声聞く

孫娘二人の手作りチョコレートバレンタインデーの夜に食みをり

花冷えの日々の続きでこの春に山のさくらの咲く日長かり

山上に人少なくて咲くさくらかすかに匂へる中に佇ちをり

妹と吾とふたりに支えられさくら見に來し母足ふらふらし

土手下の無縁仏に詣でゐし老女の死後は供花絶えをり

若きらは知らずに過ぎゆく無縁墓炭鋤ありし昔の悲話秘む

連絡のなきを案じてゐし子より電話かかり來ネパールの町より

ヒマラヤの山に眺めし星空を吾にも見せたしなどと子の言ふ

吾の背のまるくなりしを伸ばせよと帰りゐる子が時折たたく

病む母と二人のみなる病室に夜すがら鳴きてしげき虫の音

肺炎の峠超えたる老い母の眼を閉ちしまま又話し出づ

妹の吾より優しき仕草にて病む老い母に粥食ませをり

ブラジルの切手を貼れる教え子の賀状手にする正月十日

東京に大雪降りし映像に吾が思い出づる幼き日のこと

老いて病む人を見舞ひて今日の空雲るは黄砂の故と告げをり

志望校に入れし孫のよろこびを厨に立ちてまた思ひをり

それぞれの生活をする息子らに電話切るとき吾の励ます

沼べりの合歓の樹低く枝張りて咲きたる花を水に映せり

合歓咲けば防空壕に児童らとひそみし記憶十八の夏



母と弟・侃家族と弟・寛治



弟・侃の子供たちと



母と小川家の妹弟他



婦人会での宮島醤油見学（昭和43年）

疎開せし島に住みつき合歡の花年々に見て五十年過ぐ

潮止めの小沼の水のうごくとき合歡の散り花漂ひてゆく

蟬時雨わき立つ山に夫と来て墓地をおほひし落葉掃きをり

若き日の吾とうつれる写真見る教え子たちも五十路の半ば

寡婦となり二児を育てし教え子の苦勞を語らず明るく笑ふ

入院の母を見舞ふと通ふ日々丘の梅林霞むを見て過ぐ

曾孫並ぶ写真に視力薄れしを言ひつつ母の顔ほころびぬ

風寒きままに菜の花の咲き出でて姑逝きし日のめぐり来ぬ

年輪を吾が家の庭にて刻みゆく桜と思ふ朝の陽に映え

遠き日に吾が見し上野の夜桜を今宵見しとふ電話かかり来

晩婚に子を得し末の弟はみどり児の辺にうたた寝しをり

傍らに孫の少女らならび立ち八月十五日正午の黙禱

兵の日の記録を夫はワープロに打ちをり戦後五十年にして

届きたる学園記念誌戦時下の生徒の吾が詩もとどめてありき

引き潮に乗せむと夜更けて流されし精霊船の暫したゆたふ

点る灯の波に揺れをり暗き海を精霊船の照らしつつゆく

旧姓を呼び合い遠き日のごとく友らと語る古稀迎えつつ

その夫に付き添ひ看取りをするのみの日々を楽ししと言ひたり友は

亡き師をば偲ぶよすがの泰山木今年の花の高きより咲く

船を待つ岸より眺むるわが島の岬明るしガス基地灯りて

玉すだれ何時か咲きゐてジンジャーも咲くに気付きぬ母の初七日

明け方に蓮の花咲く夢見しと告げてその夜に母は逝きけり

枕辺に娘ら語るに笑ひたる母なり死ぬる一日半前

九十年生きてきざみし皴見ゆる母の遺影のまなざしふかし

今日よりは父の傍へに母も眠る納骨堂にしぐれ降り過ぐ

声遠く短く鳴きし法師蟬秋の彼岸の奥津城に聞く

つつましく生きて行年百二歳の姑の墓に木漏れ日光る

山の中のみ墓辺ふいに飛び来たる黒き揚羽が木漏れ日に舞ふ

亡き父らひたすらに待ちし島からの架橋は成りて既に三十とせ

こまごまと出納のみをしるしたる母生前の手帳出できぬ

父と母の遺影掲げてある部屋に振り子時計の変わらざる音

小春日の庭にひすがら夫と吾木々の手入れに日の暮るるまで

立春の過ぎて光の増しし空不意に小綬鶏鳴くが聞こゆる

吾よりもみな年若き中にゐて声張り歌ふひとときのあり

老いづける二人となりて夕餉どきかなかなの鳴く沼辺の森に



塩浜港（釜港、福島小学校も見える）



旅行先で（昭和 50 年頃）



旅行先で（昭和 51 年）

第3章 一〇〇号記念 爽樹合同歌集より

以下、爽樹合同歌集の「あとがき」より一部を引用。

『爽樹』合同歌集をお届けします。

掲載されている作品は歌詞「爽樹」の創刊号から九十号までに載った歌の中から各自の選択によるものです。

この八年余、一緒に学んだ会員の皆さんの作品にあらためて接し感無量です。「爽樹」発会時の趣意書に「小さいながらも自らの発表の場を持ち、一人ひとりが光となってお互いの照らし合い研鑽しよう」と記しましたが、その成果がこの歌集に示されていれば幸いです。

また、この歌集は爽樹短歌会のひとつの通過点であり、今後に向けて会員の皆さんの勉強の資として役立てて頂ければ更なる喜びです。

平成十七年七月 平川省吾

アオモジの花

一九二七年東京生まれ。四四年夏疎開で父の郷里の長崎県内の小さな村に転住。

小学校中学校に十年余勤務。その後は主婦、今は主人と二人暮らし。

九〇年、平川先生のお誘いをいただき「紅霞」に入会、引き続き「爽樹」の会員となり現在に至る。

立春の過ぎて光の増しし空ふいに小綬鶏鳴くが聞こゆる

うぐひすの初音聞こえぬ沼へだつ山より未だととのはぬ声

夕風の海を眺むる堤防の下に音して牡蛎打つ人ら

庭木々の倒れむばかりに吹き荒るる春一番のほのかに温し

島山に春の先触れをちこちに黄を滲ませてアオモジの咲く

「免状花」「卒業花」といふ三月の島山に咲くアオモジの花

新緑の島山おぼろに霞ませて黄砂降るなり昨日も今日も

かすかにも雨降るなかに純白の泰山木の花ひらきそむ

わが家へとのぼりゆく径合^{ねむ}歡の葉の頭上を覆ひ花浮かび咲く

潮入りの小沼の水の動くとき合^{ねむ}歡の散り花ただよひてゆく

磯辺より庭に移ししハマボウの黄の花すがし夏の朝あさ

槇の木の根方に自づと育ちるし鹿の子百合咲く夏の朝に

風来れば白き葉裏のそよぐ木々花と見まがふ晩夏の山に

台風は逸れて去りたり夕べ見る沖空妖しきまでのくれない

秋の日の昼のしじまに法師蝉終りの声か遠くかすかに

季ときならず咲く花にして島山に秋のさくらは寂しさまとふ

灯を消せば障子を透し仄明かり夜更けの庭を月照らすらし

ふた本の柵の木に花満ちて夕べの庭を香のひたしゆく

元旦の庭暖かく枇杷の木に残れる花がかすかに匂ふ

裸木のイロハモミジの細枝のこぞりて紅く冬庭に在り



弟・侃家族やはつひ夫婦と



息子三人と義甥・好寛君



三男と飼っていた犬・アキ
(日ノ浦の町営住宅前、左はポプラの木)



日ノ浦で
(昭和51年頃、城ノ越が見える)



弟・武征家族他と



母・小川カヅの若い頃



妹・節子夫婦と母



母・カヅ



息子3人（日ノ浦の町営住宅前で）



息子3人（日ノ浦の町営住宅の前で）



弟・武征（長男と台風で鷹島へ流された帰り）



台風で鷹島へ流された帰りの長男（後ろは飛島）

第4章

—私の短歌から— さよなら福島町より

文協いろは第27号（平成十八年三月一日発行）より

珍しく本人が、自分の短歌についてその思いを語っています。

わが町が一島の町なりしこと今年までなり合併決まりて

昨年うづの福島町報「ふくしま」の四月号に載った作品である。

そして今年、平成十八年一月一日より福島は新「松浦市」の中の福島町になった。

合併あひにふるさとの町は新しきの内となるなにか寂しき

合併が今後の福島町発展への道であることをうづ諾いつつも小さな島が村から町になり五十四年間の歴史を築きながら、時代の流れで今までの町は閉町となる淋しさ、名残惜しさが、なにかさびしきと私に思わせるのである。

若きらは知らず過ゆく無縁墓炭鉱ありし島の悲話秘む

私の住んでいる日の浦から福島港へ向かう道路の途中、右手に特別養護老人ホーム「いろは島荘」があるが、その土堤下に無縁仏のお墓が建立されている。以前は道路より低い所にひっそりとあったが、いろは島荘が出来上がったのちに町が新しく建て直している。

生け垣が茂って道路からちよっと見えにくいのが、いつも季節の花が誰かの手によって供えられているようだ。

明治中期、福島に炭鉱産業が始まった頃、最も早く炭鉱地帯となりその集落もあった日の浦、現在の様子からは想像もつかないが残された写真などでどうにか偲ぶことができる。

当時は島外からも多くの人たちが働きに来ていたが、その死亡後、身寄りが無い人や身許不明の人たちの冥福を祈るために、この無縁仏の墓が建てられたと聞いている。



福島町・日の浦炭鉱の昔（ネットの「アトリエ仕事日記」より）

第三の門出と言ひぬ閉山の島去る人は引揚げ者にて

昭和四十七年九月、町内のすべての炭鉱産業は終わりを告げた。炭鉱で働いていた人たちが、毎日つぎつぎと家財道具を積み上げた車と共に福島を去って行く姿を見送った。その中の親しかった人の言葉である。敗戦で外地から引揚げ、第二の門出と思ったのである。だが閉山となりやむなく又、新しい職場を求めてこの島を去る人は「第三の門出」と言い自分自身を励ましたのである。

炭鉱の閉山で町は急速に過疎になった。

炭鉱は今無く島より田植え済めば出稼ぎにまた人ら出ててゆく

それまで半農半漁と炭鉱の島だったので、町内の人々の中には炭鉱関係の仕事に就いていた人たちも多かった。

この人たちも働く場を得るために都会の工事場などへ出稼ぎに出て行ったのである。

廃坑に湧く水あれば水源の一つとなせり島の暮らしは

福島には水資源となる川がない。昔は各集落で湧き水や掘った井戸の水を生活用水としていたけれど、町報「福島」最終号の福島町五十四年間のあゆみによれば、昭和三十一年十月から上水道完全給水開始とされている。

それでも雨が長く降らない時には断水、時間給水となることが多かった。

すでに廃坑となった場所の地底からも水を汲み上げるための町当局の努力が続いていた。そしてその後も、

節水の呼びかけ毎夜に島内の放送を聞く雨乏しき秋（平成七年作）

福島大橋が完成し、開通したのは昭和四十二年の秋だった。それから丁度三十年の歌であるが、

亡き父らひたすら待ちし島からの架橋は成りてすでに三十年^{みとせ}

私の父は、この夢のかけ橋と言われた福島大橋を見ることなく架橋五年前に亡くなった。生前、この架

橋を切望する言葉を何度聞いたことがあるだろう。

福島住民の永年の夢がついに現実になった福島大橋、私自身も渡り初めたあの日の感激を未だに忘れ得ない。

架橋のお蔭で全くの離島でなくなったことの安心感と便利さに今も感謝の思いが湧く。

わが島もふるさと祭り鐘の音の聞こへて浮立の行列が来る

毎年ふるさと祭りが開催されるようになって、昨年の秋は第二十回を数えた。旧福島町としては最後の祭りであった。今後も変わらぬとは思うけれど、いや、もっと盛大になることだろう。

船を待つ岸より眺むるわが島の岬明るしガス基地灯りて

かつての福島炭鉱の跡地からボタ山や立坑の建物が消え、やがて企業誘致された九州液化瓦基地の白い巨大なタンクが並ぶのを見るようになった。

福島から町外へ出かける場合、今は福島大橋を渡ることが多いが、時には釜港から対岸の浦の崎まで定



福島大橋



LPガス基地(九州液化瓦斯福島基地株式会社のHPより)



日ノ浦の裏の海(伊万里湾、人形島が見える、手前は塩田跡の水田)

期船を利用する。冬の夕暮れは早い。帰りの船を待ちながら浦の崎から眺める福島に早くもあかあかと灯が点っている。九液ガス基地の灯であり、思いがけなく美しく暖かい夜景であった。

そして、その後、福島国家石油ガス備蓄基地も誘致され、昨平成十七年十月より操業が開始されている。白い巨大タンクが八つ並んだ基地の写真を町報で見たけれど、対岸の浦の崎からの夜景はまだ見えていない。



夫の退職後の新居予定地(昭和57年頃)



夫の退職後の新築時の地鎮祭



新居、完成



新居の庭で

第5章

文教いろは (27号、29号、30号) より

文教いろは 第27号 (平成18年3月1日発行) より

文教いろは…松浦市 福島町文化協会機関誌

初詣で

老いたれどまだ二人にて裏庭に冬の野菜の種播く今日は

氏神へ初詣でせむ老い夫の足弱りしも子と出てゆく



初孫の誕生時（福岡市・紅葉八幡の前で）



長男・次男家族と



母や孫たちと

夫の背に弾丸掠りし痕の今もかすかに戦後六十年過ぐ
八十路なる友がシルクロードを旅せしと駱駝に乗れる写真の賀状

文協いろは 第29号（平成20年3月1日発行）より

文協いろは…松浦市 福島町文化協会機関誌

おみくじ

はかなげに見ゆれど木槿の白き花猛暑の日々も咲きつぎ止まず

糠漬けの茄子の色よし老い二人向き合う卓に今朝も並べぬ

実の生るを共い待つなりさくらんぼの苗木を老いし二人が植ゑて

元旦のおみくじ老いし父の分も子はいただきて雪浴み帰り来



縁側で孫と



庭での孫たち



弟・寛治の結婚式で（孫たち、後ろに本人）

文協いろは 第30号（平成21年3月1日発行）より

文教いろは…松浦市 福島町文化協会機関誌

秋晴れの海

リハビリに行く車より秋晴れの海を眺むる久びさにして

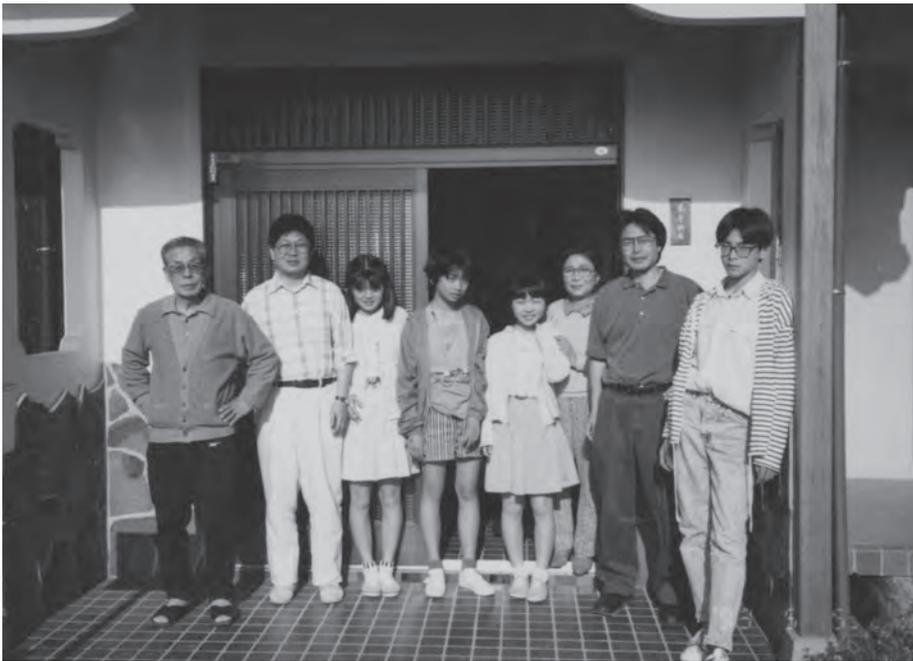
杖をつくわれを気遣ひ共に来し夫と選びて注連飾り買ふ

指宿の菜の花マラソンわが孫も走れり新聞の写真切り抜く

九十六の兄病むと聞き会はねばと今朝起き出でし夫の先づ言ふ



三男や孫たちと



玄関で孫たちと

第6章 二〇〇号記念 爽樹合同歌集より

以下、『爽樹合同歌集』（二）発行のご挨拶 を一部を引用。

平成九年四月に創刊した「爽樹」は同十七年七月に百号と、その記念「合同歌集」を発行致しました。その後八年会員一同が目標にした二百号発行が目前に迫り、それを記念して再び「合同歌集」を編集することに致しました。

今回は一人に二十五首ずつで、計二十七名の方からお寄せ頂きました。この歌集を手にとると会員夫々の思い出が蘇り、特に物故会員の歌には胸をつかれる思いを致します。ここに「爽樹」は二百号の山を越え、更に次の目標に向け努力したいと思っております。

最期に「合同歌集」発行にご協力頂いた会員の皆様と編集委員に厚く御礼申し上げます。勉強の資として役立てて頂ければ更なる喜びです。

平成二十五年十一月 爽樹短歌会代表 横田英夫

老いし日々（木寺 良子）

爽樹二百号、そして記念の第二巻目の合同歌集の発行まことにお目度とうございます。

会員の皆様と共にこの時を迎えることが出来まして心より嬉しく思います。いよいよ老年の後半に入る年齢になりますが、短歌を味わい、短歌を作れることのしあわせを、しみじみと感じる様になって来ています。これからも、これまでと同じようでも、私らしい歌を作れるように努力したいと思います。

古き葉をみな振り落とし櫨の木の若葉ふんわり新樹になりぬ

ひっそりとシャリンバイの花咲きをれどその香匂へり五月の庭に

この日暮れ夕焼け空のひろがりて杜鵑ほととぎす遠くしきりに鳴く声

泰山木咲くを仰げば偲ばるるまみえしことなく師は逝きませり

腰痛にこもり居れども日々に仰ぐ泰山木の白妙の花

沼ひとつ隔てて帰りゆく子らの車見ゆれば庭より手を振る

少しだけ窓開けられて六階の病室にとどく朝蟬の声

入院のわれを見舞ひて帰る夫が握手うながし手をにぎりたり

子らと来て眺むる秋の海原に淡き島影「壱岐ならん」と聞く



夫婦で弟妹が住む東京旅行
(鬼怒川温泉など、平成8年)



同じく東京旅行時 (平成8年)



弟らと (平成14年)

去年の今日退院せしと思ひつつ朝の厨に胡瓜切りをり
糠漬けの茄子の色よし老いふたり向き合う卓に今朝も並べぬ



夫の米寿のお祝い（平成 21 年）



長男の還暦（平成 22 年）



次男の還暦（平成 24 年）



裏庭で（平成 24 年頃）

老いたれどまだ二人にて裏庭に冬の野菜の種播く今日は

征^ゆきし日もありて命を守り来し夫^{つま}なり米寿を今日迎へたり

米寿なる夫と並びて六十年共に経し日を子らに祝はる

実の生るを共に待つなりさくらんぼの苗木を老し二人が植えて

リハビリに行く車より秋晴れの海眺むれば沖はかすめり

デイケアの今日のひととき訪れし生徒らと歌う唱歌「ふるさと」

逆光にシルエットなす前山の木立に透けて秋の日は落つ

八十路にて同期の会は最後とふ記念の写真送られて来つ

老いし身の衰え言ふも庭畑に夫の動きり秋の陽浴びつつ

ひとしきり鴝もずの声せり雨かとも思ひし空の晴れわたりゆく

金色の塔現れしごと黄葉の大公孫樹立つ沼の向こうに

柗ひいらぎの樹の灰白く見ゆるまで小花咲き満ち匂ふ夕暮れ



父・政平 49 回忌法要時（平成 22 年）



小川家 4 姉妹（平成 22 年）



正月の一コマ（平成 27 年元旦）

わが庭の年経しひいらぎ葉のとげの自づと失せつつ花の香高し
老い二人そろそろ動きて野菜苗植うる畑にさくら散りくる



ひ孫たちと（平成 26 年）



小川家集合（平成 30 年頃）

第7章

残っていた色紙・短冊より
(順不同・重複あり)

亡き人の庭に植ゑたる柿の木に生りし実いただく七回忌来て

消息のようやく知れし教え子も来るとふ今日の集ひに出でゆく

墓地近き井戸の真清水この夏のひでり長きに水位変らず

朝夕に忘れてならぬ服薬のありて八十路にわれは近づく

敬老の日にはかならず来る電話「今さっぼろよ」と孫の声聞く

ふるさとは合併決まりて新しき市の内の町となる日近づく

新しき車に夫とわれを乗せ子は走らせぬ花野に向かひて

わが町より「ラジオ体操」の生放送いそいそと吾もグラウンドに向かふ

高齢者チームにわれも加はりてボールを追ひをり秋空の下

古稀過ぎていよいよ日々を大事にと友の便りのことばをいただく

転勤してこの島去りていく人の今宵うたへる木曾節聞きをり

ジンジャーも庭に植ゑよと賜ひける人を偲ばむ白き花匂ふ

五稜郭にこもりし武士ら汲みし井の跡をかこみて咲く風蝶草

観月会始まりゐるらし山上に太鼓打つ音風に乗りくる

わが庭にピラカンサスの実が赤かりしと遠き日を恋ふ電話に友は

紅萩をゆらし風過ぐこの萩を賜ひし人のふと偲ぼるる

夕方になりて日の射す崖下につはぶきの花の黄がかがやくも

ふるさとの島町なりて五十年を祝はむ共に過ぎ来し月日

「体育の日」にて賑はふグラウンドにわれも木球思ひきり打つ

すこやかに在る今の中に遠きわれを訪れたしと友のたよりは

株分けてもらひし萩の咲きにけり花すくなけれど紅のいろ濃く

移りゆきし人の残せるホトトギス秋ふかまりし庭に咲きつぐ

魚を煮てコロツケづくりもてなせる母は八十路を笑みてむかえり



歌は良子作、絵は妹・節子作



西新デイサービスにて



夫・四十九日の法要時（平成 26 年）



夫・三回忌の法要時（平成 28 年）



ひ孫・七海を抱いて（平成 27 年）



子供たちとの食事会（平成 27 年末）



ひ孫も交えて（平成 30 年正月）

第8章

残っていた手書きメモより

夏希ちゃんを詠む

平成二十一年五月十六日の折

にぎにぎを直ぐに真似してわれを見つむ初のひ孫を今日抱きにけり
名を呼べばふり向くひ孫八ヶ月少し笑へりいとしさ湧き来く

咲良ちゃん

平成三十年三月四日

わが名より一字を添えて「咲良」ちゃんひ孫の名前さだまりにけり
師と仰ぐ人のひ孫とわがひ孫おなじ名を持つ偶然にして



西新デイサービスセンターにて



西新デイサービスセンターにて



西新デイサービスセンターにて



小川家・4姉妹全員集合（平成28年）



ひ孫・美波と七海（令和5年）



ひ孫・咲良と陸（令和2年）

木寺良子 年表

昭和									和暦
10年	9年	8年	7年	6年	5年	4年	3年	2年	西暦
									年
1935	1934	1933	1932	1931	1930	1929	1928	1927	年齢
	弟・吉明、誕生			弟・侃、誕生		妹・節子、誕生		父・小川政平、母・カズ	主なイベント
								東京府下向島寺島町に生まれる（2月14日）	
									トピックス他

昭和									
20年	19年	18年	17年	16年	15年	14年	13年	12年	11年
1945	1944	1943	1942	1941	1940	1939	1938	1937	1936
18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
	夏、長崎県北松浦郡、福島村へ疎開 3月、上野高等女学校卒業 弟・武征、誕生			上野高等女学校入学 妹・たま代、誕生		弟・省三、誕生		妹・はつひ、誕生	
終戦				アメリカと開戦					

昭和										和暦
30年	29年	28年	27年	26年	25年	24年	23年	22年	21年	西暦
1955	1954	1953	1952	1951	1950	1949	1948	1947	1946	年齢
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	主なイベント
この頃か、日ノ浦の町営住宅に転居（周囲にポプラ）			次男・知記、誕生		長男・佐和記、誕生	木寺諭吉と結婚（9月22日） 新居は、福島町日ノ浦（ダブの傍の借家）		弟・寛治、誕生	この頃からか、福島小・中学校に勤務開始	トピックス他
				福島町誕生						

昭和									
40年	39年	38年	37年	36年	35年	34年	33年	32年	31年
1965	1964	1963	1962	1961	1960	1959	1958	1957	1956
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
			父・政平、死去						三男・昌記、誕生
	東京オリンピック								

昭和										和暦
50年	49年	48年	47年	46年	45年	44年	43年	42年	41年	
1975	1974	1973	1972	1971	1970	1969	1968	1967	1966	西暦
48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	年齢
長男、ヨーロッパ旅行		長男、大学卒業					福島町婦人学級、宮島醤油など見学			主なイベント
			炭鉱、閉山		大阪万博			福島大橋竣工		トピックス他

昭和									
60年	59年	58年	57年	56年	55年	54年	53年	52年	51年
1985	1984	1983	1982	1981	1980	1979	1978	1977	1976
58	57	56	55	54	53	52	51	50	49
		義母・チエ、死去 次男の次女・佑子、誕生	夫・諭吉、退職、福島町日ノ浦に持家新築	三男、大学卒業 次男の長女・知佳、誕生		初孫・和司（長男の息子）、誕生	次男、大学卒業		第28回九州地区地域婦人大会参加（熊本市）

平成							昭和			和暦
7年	6年	5年	4年	3年	2年	元年	63年	62年	61年	
1995	1994	1993	1992	1991	1990	1989	1988	1987	1986	西暦
68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	年齢
								この頃か、胆石手術（福岡市・原三信病院） 合同歌集つばき、発行		主なイベント
阪神淡路大震災										トピックス他

平成									
17年	16年	15年	14年	13年	12年	11年	10年	9年	8年
2005	2004	2003	2002	2001	2000	1999	1998	1997	1996
78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
一〇〇号記念爽樹合同歌集、発行				最初の圧迫骨折で入院・加療（福岡豊栄会病院）		第7回福島桜祭り、参加	合同歌集つばき第三号、発行		母・カヅ、死去 夫婦で東京の弟妹と鬼怒川温泉などを旅行

平成										和暦
27年	26年	25年	24年	23年	22年	21年	20年	19年	18年	西暦
2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	2008	2007	2006	年齢
88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	主なイベント
<p>長男夫婦の家（福岡市）へ転居（デイサービス利用など） ひ孫・七海、誕生</p> <p>夫・諭吉、死去（4月24日） 二〇〇号記念 爽樹合同歌集、発行</p> <p>次男・還暦</p> <p>父・政平、49回忌法要 長男・還暦</p> <p>ひ孫・翔、誕生 夫・諭吉の米寿お祝い</p> <p>ひ孫・夏希、誕生</p> <p>心臓弁膜症の手術（福岡市・九州医療センター）</p>										トピックス他
				東日本大震災						松浦市となり福島町は消滅

令和					平成			
5年	4年	3年	2年	元年	31年(平成)	30年	29年	28年
2023	2022	2021	2020	2019		2018	2017	2016
						91	90	89
本冊子を編纂			ひ孫・美波、誕生 三回忌法要、夫・七回忌法要			10月16日、死去(91歳)	ひ孫・咲良、誕生	ひ孫・陸、誕生、 夫・三回忌法要 小川家4姉妹全員集合の写真(日ノ浦で)
移行 新型コロナ、5類へ	ウクライナ侵攻開始	2020	東京オリンピック	新型コロナ日本で確認(1月)				

あとがき

母・良子が短歌を作っていることは、子供としては知ってはいましたが、生前にはほとんど読んだことがありませんでした。一方、父・諭吉は、随想を福島町の発行の「文教いろは」に掲載させていただいており、こちらも読んだことはありませんでしたが、父が体調をくずしたことをきっかけに、小冊子としてとりまとめ、父に喜んでもらえるとともに、子供たちにとっては父の思いを知る良い資料になりました。

このような経緯もあり、母の思いなどを知るための小冊子を作成することは、長男の私の一つの懸案でした。もつと早く作成し、母に見せたかったのですが、結局、母の病没後、おおよそ五年経つての作成となりました。

この短歌集は、母が既に発表している作品を主に整理していますが、中には、短冊などに書き付け未発表のものもあり、この小冊子に入れた方が良いかどうか迷いましたが、残っているものは掲載しました。

また、父は写真が趣味の一つであったため、子供たちが小さかった頃からの写真が、母の遺品としてかなり残っていました。これらの写真は、母、家族・親族、ふるさとを思い出す貴重な資料と考え、母の生涯に関係が深かったと思われるものを選び出し、ほぼ年代順に掲載いたしました。子供たちが知らないご友人関係などの写真もありましたが、今となつては知る由もないため、私たち家族と母の実家の小川家に関する写真を優先させながら選びました。

この小冊子が私たち家族・親族の他、ふるさと・福島町に関係するみなさまの思い出を呼び起こすきっかけになれば幸いです。なお、不適切な表現や写真などがあれば、ご指摘をお願い致します。

令和五年七月

長男 木寺 佐和記

アオモジの花

—— 木寺良子 短歌集 ——

発行日 .. 令和五年九月

短歌作 .. 木寺 良子

編集・発行 .. 木寺 佐和記

編集協力 .. 木寺 知記・木寺 昌記

写真提供協力 .. 小川 寛治

デザイン・印刷 .. (株) 星光社
